## Opera スイスで藤倉大のオペラ《黄金虫》が話題

スイス国営ラジオで話題になっていた、藤倉大の子供向けオペラ《黄金虫》の千秋楽を取材した（5月9日）。毎年1作は子供用のオペラを上演するバーゼル市立歌劇場が今年の演目として藤倉に委嘱したこのオペラは、3月9日に初日を迎えてから、全部で10回公演の客席がほとんど子供で埋まっていたという。

エドガー・アラン・ポーの同名小説を基に、ハンナ・デューブゲンが子供にも解りやすいドイツ語で台本を書き上げている。しかし音楽は難しい。オペラ・スタジオのメンバーからなるキャストたちは、その難しさに悲鳴をあげていたというが、度重なる稽古でなんとか世界初演に漕ぎ着けたという。デルニエ（最終日）のキャストは音楽大学の学生だというが、自然な歌唱と演技でこの作品に若いエネルギーを与え、子供たちにも違和感なく楽しめる公演になるよう貢献していた。

舞台の下手（しもて）（舞台向かって左側）に、楕円形に組まれたカーテンレールがあり、上手（かみて）（舞台向かって右側）には海賊ふうに黒い布を被った11名の室内オーケストラと、バンダナ姿の指揮者がいる様子から想像がつくように、黄金虫に導かれて海賊が隠した宝を探しに出かける物語だ。しかし藤倉の音楽は、そのストーリーよりも、エドガー・アラン・ポーの怪奇な世界を体現しており、無邪気に喜ぶ子供たちとのミスマッチがグロテスクだった。打楽器に代表される高度な技術を持ったオーケストラと歌手陣が成功の決め手となっていたが、特にヒロインのアンナ・カンプマニー・ドゥフと祖母役のアレクサンドラ・マイヤーの安定した美しい声が印象的だった。（中 東生）